国語

（問題）

2026年度

〈2026 R08202024〉

注意事項

1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

2 問題は2～12ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 マーク解答用紙記入上の注意

（1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。

（2）マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	◐悪い	◐悪い	
マークを消す時	○良い	◐悪い	◐悪い	

5 記述解答用紙記入上の注意

（1）記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。

（2）所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

（3）受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

7 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。

8 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。

9 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

10 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

（一）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

無著像世親像の毅然たる姿はわれわれの想像力を封じてしまう。［Ⅰ］、写実とは、事物を離れてとりとめなくなった想像力をあらためて現実の事物に引きとめておこうとする態度から生じた一形式である。思想が身体的な律動とともにあり、想像力がもともと事物と結びついていて、それ故に、外部的な事物に規制される必要のなかった古代にあっては、だから、写実ということは必要としなかったに相違ないのである。つまり、写実とは、いろいろの美の形式がすでに存在し、通有的なものを知っていることによってとめどなく大きくなった思想と［Ⅱ］との貪婪のために昏迷した精神が、最後に現実の事物に立ちもどることによって発見した一形式である。思想や［Ⅱ］などというおのれの内部的な心的状態にわずらわされず、一切の人間的なものを無視することなく事物として観察することによって、再び事物に対立するものとして人間を救おうとした態度のあらわれだといってもよい。写実というものが、現実の不撓性と思想あるいは［Ⅱ］の柔軟性との間の不協和を認め、おのれを危くするようなものをも受けいれるのはこの故である。

しかし、人間というものはいつになってもわれわれにとって最も関心のある対象である。造型的な諸芸術において、肖像というものが、いつになっても深い関心をもたれるのはこの故であろう。そして、肖像において、人間的なものを無視することなく事物として観察するという態度は、［Ⅰ］、造型的諸芸術のうち最後のものであろう。

一体、人間あるいは人間的事実というものは遠く距っていれば、どんな風にでも考えられ感じられさえするものである。距ってさえいれば、その人間についてほとんどどんなことでも分るし分った上で愛することも出来、おそらく誰でも博愛家にすらなれるものだ。が、その人間と面をあわすとそう簡単には愛せなくなる。眼前では人間という半透明な存在が対象と観察するものとの間に厚い層を生ぜしめて、さっぱり分らなくしてしまうからである。一方では対象となる人間が、一方では観察する人間が、それぞれの仕方で相互の間に壁を塗る。そこで気おくれしたものは、見たままの外見にあざむかれまいとして、かえってそんな用心にあざむかれるようなことになる。つまり、外見はあざむくなどという都合のよい論理を考え出したあげく、今度はそんな観念にあざむかれて人間を捨てて人間から離れてしまう。が、遠く離れて理解すること、あざむかれて愛すること、つまり、結局はおのれをあざむいて理解し愛すること、これは容易である。むしろ容易すぎることが人をおとしいれるのだ。A困難なのは、考えられた、もしくは、夢想された人間でなく、見たままの人間を愛することだ。概念的なものに何らの信をおかず、眼前に見るものを理解することである。人間の現実の外見から離れれば、人間を無視し否定することも、愛することも、いずれにしろそれほど困難でなくできるが、そんな理解をしたところで何になろう。眼前の厚い壁につきあたって傷ついたおのれを含めて人間を事物と観察しながら、なお人間を求める意欲、この二重の場をいつも交互にあるいは同時に体験することによって、われわれの思想は熟すのである。そのために、思想はいつも眼前の対象の抵抗に拮抗していなければならぬ。［Ⅲ］

われわれをあざむくのは外見でなくて、観念――多少ともわれわれに都合のよい期待を含んでいる観念である。観念は二重の仕方でわれわれをあざむく。はじめに、あまり早くまとまろうとする性急さによって、次に、こうしてあまりに早く出来上った結果において。現実の事物の外見はむしろこういう観念にあやまられたわれわれを再びもとのところまで連れかえるものである。だから、必要なのは外見にあざむかれまいとして警戒することでなく、外見が真実を語るまで待つことである。それは褒賞を無視したのんきさであり、そんなのんきさは勇気でもあり、信頼感でもある。そして、思想が事物から離れたのち、人間はこういうのんきさを通してはじめて人間を理解するのだ。が、だからといって、もちろん抽象的な計量が必要でないなどというわけでは毛頭ない。〔イ〕抽象的な精密な計量はそのためにどれほどの忍耐と時間がかけられても、到底充分というわけにゆかぬほど重要な位置を占めるものであろう。が、しかし、そういう計量は、結局のところ、おのれを主張するためでなく無に帰するため、つまり、観念を作りだすためでなく、逆に、出来上った観念を毀すため、更にいえば、そういう性急な観念の出来上るのを防ぐためになされるとさえいってよかろう。われわれの思想はいつも生れたばかりの状態におかれていなければならないのである。いいかえれば、思想は危険な状態におかれていなければならないのである。われわれの思想はともすれば観念に頼っておのれを安全におこうとするが、そんなことをすれば思想はひからびてしまう。科学上の公式に則ったもの以外、推理や論証はいつも事物にかえっておのれを空しくした上で、はじめからやり直すということをしないと成長しえない。（科学上の公理あるいはその発見にしても最初は［Ⅰ］美にかかわるものなのだ。）のみならず、たとえどんなにしたところで推理や論証が自然の事物以上に豊かになりうるわけのものではない。〔ロ〕

とはいえ、自然の事物に忠実なのは写実の芸術のみでないことはもちろんである。むしろそうでない芸術などがありうるなどとは思えない。われわれの見なれた人間のすがたとかなりかけはなれた姿態を彫った飛鳥の仏師たちにしても自然の外見を無視しているわけではない。極端にいえば、ああ見えたから、そして、ああいう風に理解したから、ああいう形姿を彫ったのである。自然の外見を変形しているといわれれば、飛鳥の仏師たちは――少くとも百済観音や中宮寺の如意輪観音を彫った仏師たちは――おそらくはじめ何をいわれたのか見当がつかないにちがいない、あまり思いがけぬ問いをかけられたものが何をいわれたのか分らぬように。これらの彫像は［Ⅳ］の定着されたものにほかならないのである。が、しかし、幸福な時代にあっては意識せずにそうなったことを、通有的なものを知っている澆季末世にあってはまずはじめにそれを意識することからはじめなければならぬ。自然の醜さを隠そうとしたり、自然の美しさを

増そうとしたりすることは古代にあっては全く思いもしなかったことであろうが、末世にあってはそんな心持ちをまず捨てることからはじめなければならない。〔八〕観念に頼って自然を変形したり、自然に何ものかを加えたりしようとすること、また、そういうことができるなどと思うことは、すでに精神の貧困から生じるに相違ない。B そういう貧困な精神は自然を歪曲するが、同時に、そのことによってみずからますます痩せ細る。

すぐさま観念的な推理や論証におもむきたがる精神には多少 V が欠けているのだ。自然を知ろうとする意欲は決して弱いとはいえないにしても、そういう精神は性急さのために知りえまい。事物に立ちもどっては進み、再び立ちもどっては進むことを繰りかえしつつ待つという忍耐に耐えうるもののみが自然の豊饒のうちにあるあらゆるものの予表の意味を見出すのだ。自然は性急なわれわれの観念に何も答えようとはしまい。というより、自然が答えるまでわれわれの観念は待っていられないのである。答えるまで問いをかけぬこと、もっと正確にいえば、問いそのものが結局答えのうちに包含されてしまうような仕方でなければ問いをかけぬこと、これが自然を知る秘訣であろう。観念はあまり早く答えを要求し、自然が答えるより前に自分で答えを組み立てようとする。そうして精神は美を求めていそがしくかけまわるが、結局、そういう美の存在しないことを知るにすぎない。そんなとき、われわれはあらためてもう一度現実の事物にかえって、事物をそのままの状態で認め、崇敬さえすることからはじめる以外仕方のないことを知るのである。〔二〕

ところで、意味を見出すということが、見つめるという作用――あるいは認識する作用――にのみ結びついたものしか意味しないとすれば、見出したところで、ほとんど何にもなるまい。意味を見出すことが表現と結びつくのでないかぎり、理解ということは実はありえない、といい切ってしまいたい。自然のほか美しいのは表現された形あるものだけである。〔ホ〕表現されえないものは理解されたのではない。むしろ表現という迂路によってのみ真の理解はなしとげられるのだ。自分では何一つ表現することをしない、いわゆる通人と称されるもののあやまりは I ここにあろう。意味を眼だけで追うているものは結局虚しく時を空費しているにすぎない。思想というものはただ発見された状態のままにおかれては何ものもなしえないのである。表現されることによって再発見されるのでなければ、むなしく消えいってしまう。あるいは、はじめ発見されたと思われたものは、実はただ発見への可能性だけなのかも知れない。この可能性を現実のものとすること、つまり、まだ発見される可能性だけしかない未来の発見物を現実の事物の抵抗を通して認識しようとする健康な意欲、あるいは、まだ模糊としてさだかでない発見物を明確な形あるもの（もちろん推理や論証によって明確なのではなく、現実の形そのものにおいて明確なという意味である）として立派に再発見しようとする意欲、こういう意欲によって表現が要求される。この要求は、予測しえぬものをおそれぬだけでなく、むしろそれを期待する逞しい感情でもある。何でもあまり性急にあまり容易に予測してしまう精神――というのは、自分の予測しうるものだけは何でも手取りばやく予測し、予測しえぬものは器用に割り切ってしまうからなのだが――はこういう期待は決してしまい。何故なら、この期待は、いつも原初の状態へとかえって出発するという、思想にとって非常に冒険的な事物への信頼をともなうからである。同時にまた、それは観念の割り切れぬ半透明な人間の肉体の厚みへの信頼をともなうのだから。しかし、こういう迂路においてのみ、いつもはただ動物的なものにすぎぬ、あるいは、ただ事物にすぎぬ人間の肉体がはじめて人間のものへと復活し、同時に、そのことによって、思想が観念から脱却して成長するのである。これに反して、まだ可能性にすぎぬ思想をいそいで磨きたてるものは人間の肉体を動物あるいは事物の地位に堕してしまう。事物や肉体を無視するから、事物も人間もともに失われてしまうのである。どんな可能性にしたところで可能性そのものが美しいなどとはいえまい。まだ存在しないものがどうして美しかろう。可能性が美しいなどというのは言葉の濫用、論理の濫用にすぎぬ。C 美しいのはいつも現実である。

立派に表現され形づけられたものはわれわれの予測やあるいは期待さえ超えて遥かに多くのことを意味する、などといまさらいう必要はあるまい。形のうちに人間と事物とがぬきさしならぬ仕方で出合うのだが、この出合いが走ろうとする観念に抵抗して観念を屈折させる。そこで観念があらためて思想になると言ってもよい。が、思想と II と事物と、そのままでは互に互をどうすることもできぬものを共に載せている一つの形はわれわれの思索にまことに難解を感じさせる。無著像世親像のような彫像はその現前によってこの上なく明確に何かを呈示しているにもかかわらず、われわれの思索にとって、分ったような分らぬようなものを感じさせるのである。が、しかし、分りやすい芸術作品などというものがあるだろうか。思索に対して少しも抵抗せぬ分りやすい作品など少しも美しくあるまい。抵抗のない安易な仕事とは、もともと、思索が分ったところにしか触れなかった仕事である。そういう仕事によって人間は何らの変化もおこすまい。観念はそんな抵抗のない明白さで満足するかも知れぬが、いつも非悟性的なものをもつ人間は満足できまい。賭博の外に出れば、どんなものでも理論づけられるが、必要なのは――人間が変化するために必要なのは――そういう観念の割り切れた明白さでなく、真理を現実の事物に、そして人間の肉体に、賭けることなのだ。そういう危険を冒さぬ観念はどんな必然性でも探しだすが、同時にそれは無数の必然性のありうることを証明するだけにすぎまい。この無数の可能性にとりまかれて昏迷しないためには、もう一度現実の事物と人間の肉体とを媒介とすることによって精神を建てなおすほかあるまい。

思想が通有的なものを知って観念となり、その貪婪さのとめどなくなってしまったとき、写実の方法がどんな風にして人間の精神を救ったかを、ときに考えてみるのも決して無駄にはなるまい。

（岡本謙次郎「写実について」による）

※WEB 掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。
『運慶・ルオー・ブレイク：岡本謙次郎美術批評集成』所収「写実について」ISBNコード： 9784801008557 水声社／2025年／初版 引用ページ：82-88

注　無著像世親像…鎌倉時代の肖像彫刻で、運慶と一門の仏師が制作した学僧の兄弟の像。
百済観音…飛鳥時代の仏像。
中宮寺の如意輪観音…飛鳥時代の仏像。菩薩半跏像（伝如意輪観音）。
澆季（ぎょうき）…道徳と人情が薄れた末世のこと。
予表…事前に出現するきざし。

問一　空欄 Ⅰ ・ Ⅱ ・ Ⅴ に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　Ⅰ 多分　Ⅱ 情念　Ⅴ 忍耐力
ロ　Ⅰ 畢竟　Ⅱ 思念　Ⅴ 決断力
ハ　Ⅰ 大体　Ⅱ 感覚　Ⅴ 行動力
ニ　Ⅰ 通常　Ⅱ 印象　Ⅴ 分析力
ホ　Ⅰ 実際　Ⅱ 情熱　Ⅴ 実行力

問二　傍線部A「困難なのは、考えられた、もしくは、夢想された人間でなく、見たままの人間を愛することだ」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　自分の想像を超えることのない人間を愛することは容易だが、現実的に博愛家となることが大事だということ。
ロ　距りをものともせず、あざむかれることを相互に用心したうえで、外見はあざむくという論理を拒否しなければいけないということ。
ハ　人間を無視し否定することは人間の現実から離れることであり、見たままの人間は相互の間に壁を塗るため概念化が避けられないということ。
ニ　自分にとって都合のよい期待を含む概念的な人間ではなく、観察の対象となることへの抵抗を示す人間に向き合い、理解する必要があるということ。
ホ　あざむかれて愛することはおのれをあざむいて理解することであり、それは人間を事物と観察しながら人間を求める意欲に欠けているということ。

問三　空欄 Ⅲ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　愛することを知る人間はむしろ距りを求めるのだ。
ロ　外見にあざむかれることを用心しない美は無敵である。
ハ　人間は実はそう遥かなところにいるのではないのだ。
ニ　見たままの人間こそ毅然たる姿だと確実に知るだろう。
ホ　人間を遠く離れて理解したとき思想もおのずと完成する。

問四　空欄 Ⅳ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　初源的な外見
ロ　原始的な信仰
ハ　抽象的な観念
ニ　写実的な肖像
ホ　不自然な変形

問五　傍線部B「そういう貧困な精神は自然を歪曲するが、同時に、そのことによってみずからますます痩せ細る」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　現代の芸術家は自然を変形することにより、古代にはなかった不自然な芸術を生み出してしまうということ。
ロ　末世の芸術家は自然の美しさを増そうとすることにより、古代にはなかった繊細な美を作り出すということ。
ハ　飛鳥の仏師たちは無意識に自然を歪めることにより、人間のすがたとかけはなれた彫刻を生み出したということ。
ニ　幸福な時代の芸術家たちは観念に頼って自然を変形することで、研ぎ澄まされた美を作り出すということ。
ホ　古代の芸術家は思想と想像力が外部からの規制を受けなかったので、写実による自然の再現は容易だったということ。

問六　次の文は本文中に入るべきものである。本文中の〔イ〕～〔ホ〕の中から最も適切な箇所を一つ選び、解答欄にマークせよ。

呼んでもやって来ない山なら、こちらから出むいてゆくのがいいのである。

問七　傍線部C「美しいのはいつも現実である」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　現実は表現された形あるものであり、そこには冒険的な事物への信頼と可能性でしかない未来の発見物を事物の抵抗を通して認識しているから。

ロ　自然のほか美しいのは表現された形あるものだけであり、それは現実として出現することで未来の発見物としての可能性が形となっているから。

ハ　現実は表現という迂路により複雑に理解されるものであり、それは見つめるという作用によってあるがままに自然が再現されているから。

ニ　自然のほか美しいのは表現された形あるものだけであり、そのことは表現されることで再発見した思想を含むだけでなく通人のあやまりを回避しているから。

ホ　現実は表現という迂路により真に理解されるものであり、それは現実の事物の抵抗をも期待する逞しい感情や、人間の肉体の厚みへの信頼をともなうから。

問八　本文の内容と**合致しないもの**を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　写実とは、思想や想像力が外部的な事物に規制されることのなかった古代には必要とされず、現実と観念の不協和を認めながら事物を観察しようとする形式である。

ロ　遠く距った場から見る観察の対象となる人間は観念の産物であるため性急な理解に基づいており、容易に愛することも理解することもできるが、そこには思想が観念から脱却して成長する機会は期待できない。

ハ　自然を知ろうとする意欲を持ったとしても、観念的な推理や論証を過度に信じてしまうことで自然は歪曲されてしまい、精神が期待する美も堕落してしまう。

ニ　無著像世親像が見るものの想像力を封じてしまう理由は、分りやすい形へと堕してしまう観念を拒み、表現された形として現実に存在するためである。

ホ　抵抗のない安易な仕事は観念のみで実行することができるが、それは予測できるものだけを見ようとする精神と性急な理解に基づくことから、眼前の人間を愛することに結びつくことはない。

（二）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

※この部分は、著作権の関係により掲載ができません。

問九 次の文は本文中に入るべきものである。本文中の〔イ〕～〔ヘ〕の中から最も適切な箇所を一つ選び、解答欄にマークせよ。

そして論理的思考の型は、それぞれの社会が何を重視し文化の中心に据えるのかと深く関わっている。

問十 空欄 Ⅰ ・ Ⅱ ・ Ⅳ に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ Ⅰ 感情論理 Ⅱ 複合的思考 Ⅳ 人権の尊重
ロ Ⅰ 関係論理 Ⅱ 選択的思考 Ⅳ 国民主権の行使
ハ Ⅰ 本質論理 Ⅱ 多元的思考 Ⅳ 公共の福祉
ニ Ⅰ 内在論理 Ⅱ 本質的思考 Ⅳ 市民運動の展開
ホ Ⅰ 客観論理 Ⅱ 包括的思考 Ⅳ 社会の発展

問十一 空欄 Ⅲ に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 不明瞭な論理構造
ロ 見えない文化衝突
ハ 日米間の教育格差
ニ 不思議な文章表現
ホ 英語の論理的思考

問十二 傍線部A「アメリカとフランスの小論文の構造は実は全く異なっており」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ アメリカの小論文は直線的な論理構成で論を進めるのに対して、フランスの小論文は結論を全く提示しない形をとることで現実社会の複雑性を小論文自体に反映させる点で相違があるから。
ロ アメリカの小論文は鋭い論理性によって国際的標準であるのに対して、フランスの小論文はアメリカと比較して論理性において脆弱であるために国際性に乏しい点が全く異なるから。
ハ アメリカとフランスの小論文の構造が全く異なるのは、アメリカの小論文には単純化した論理的思考法がある一方で、フランスの小論文には異なる見方を総合して発展的な結論を導き出す思考法が内在しているから。
ニ アメリカとフランスの小論文の基盤に大きな影響を及ぼした主たる要因は、アメリカ経済の発展と英語の国際的普及であり、この二つが両国の小論文の構造に大きな変化を与えたから。
ホ アメリカとフランスの小論文はいずれも西洋の論理を持つことで共通点が多い一方で、地政学的・文化的に大きな隔たりがあることで、構造的な差異が自ずと発生してしまうから。

問十三 空欄 Ⅴ に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ どの領域の論理を使うのか
ロ どの国の政治倫理に従うのか
ハ どの地域の原理に則るのか
ニ どの有限な「型」を示すのか
ホ どの国の法に注目するのか

問十四 傍線部B「文化相対主義」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ある言語が論理的か否かなど、実際には文化間での優劣は存在するが、公平に比較・研究するために、こうした価値判断には言及しないという学問上の考え方。
ロ メインカルチャーとサブカルチャーなど、文化の中にも多様な構造が存在することから、その実相を単純化して把握するべきではないという考え方。
ハ ある文化的事象は、さらに下位の構成要素から成り立つため、文化を論じるためにはその最小単位と見なせる要素にまで細分化して分析するべきだという考え方。
ニ ある特定の文化はそれ自身の価値体系に基づいて評価されるべきものであって、安易な類型化や他の文化との比較はできないという考え方。
ホ 文化は資本主義の重要な要素の一つであり、常に国家の支配のもとで相対化され、政治・経済・社会の生活に影響を与えるという考え方。

問十五　本文の内容と合致する最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　論理的思考は、個人の感性と趣味に密接にかかわることから、各国の独自の論理と思考法があり、非国際的なものとして存在する。

ロ　論理的であるということには記述に必要な要素が読み手の期待する順番に並んでいるのが不可欠で、文化的差異よりも重要となる。

ハ　それぞれの文化圏で自国と共通する普遍的な論理が存在することを十分に理解しなければ、各国家間の衝突の回避は不可能となる。

ニ　〈主張―根拠―結論〉という論理的・合理的なエッセイの書き方は、いかなる国においても文章を書く際の基本的なスキルである。

ホ　文章の論理性は社会的な合意によって成立することから、論理的思考は世界共通で不変なものではなく、領域や文化により異なる。

問十六　傍線部**1**（格ダン）・**2**（円カツ）の**カタカナ**を漢字で表現したとき、同じ漢字をカタカナ部分に用いるものを、次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。

1　格ダン

イ　ダン熱材
ロ　三ダン論法
ハ　応援ダン長
ニ　座ダン会
ホ　ダン房器具

2　円カツ

イ　就職カツ動
ロ　説明のカツ愛
ハ　平和へのカツ望
ニ　組織統カツ
ホ　カツ落事故

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

※この部分は、著作権の関係により掲載ができません。

問十七　傍線部1は、藤原義孝の和歌「秋はなほ夕まぐれこそただ［　　］荻の上風萩の下露」に拠った表現である。上記の和歌の空欄に入る最も適切な文字列を作り、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問十八　傍線部2・3の意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

2
イ　どことなくしみじみした情趣を醸し出していく
ロ　知らぬ間に風の吹く音が騒々しくなっていく
ハ　何とも落ち着きのない状態となっていく
ニ　それとなくものさびしくなっていく

3
イ　格子戸をお閉めした音に、はっと気付き寝所を出た。
ロ　格子戸をお開けしたので、目を覚まして起き出した。
ハ　格子戸をお閉めしたことに驚いて、身体を起こした。
ニ　格子戸をお開けした音を、はっきりと感知なさった。

問十九 傍線部4・5・7・8の主語は誰か。最も適切な主語の組み合わせを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　4　女房　5　おとど　7　上　8　筆者
ロ　4　筆者　5　筆者　7　内外の人々　8　園守
ハ　4　女房　5　上　7　筆者　8　園守
ニ　4　女房　5　筆者　7　上　8　筆者
ホ　4　筆者　5　筆者　7　上　8　女房
ヘ　4　筆者　5　上　7　上　8　内外の人々

問二十 傍線部6の和歌が表現している内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　君が丹精した菊が、例えようもなく美しく咲いている。
ロ　君の名望は素晴らしく、はるか欧米にまで及んでいる。
ハ　君が菊を好むことは、九州の人々さえ聞き知っている。
ニ　君の花畑の見事さは、国の隅々にまで響き渡っている。

問二十一 本文の筆者と同等の身分の人物として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　一条天皇
ロ　清少納言
ハ　藤原定子
ニ　藤原道隆
ホ　紫式部

問二十二 本文の内容と合致する記述として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　「上」と筆者が暮らす本宮が焼亡し、仮宮に不便をかこってきたが、ようやく完成した新宮に落ち着いた。
ロ　「上」は菊を取り分け好んだので、女房たちに特に命じ、美しい花が常に庭に満ち溢れるよう手配させた。
ハ　「上」に対して筆者は深い尊敬と愛情とを寄せており、常に上を賛美し、その言動に注意を怠らなかった。
ニ　「上」と「おとど」の関係は良好で、年中楽しい季節の催しが行われ、豪華な食事が用意されたのだった。
ホ　「上」は菊の品種に一家言を有しており、さまざまな賓客を招き、その率直な感想に耳を傾けるのだった。

（四）次の文章は、唐の政治家・書家である顔魯公（顔真卿）について論じたものである。これを読んで、あとの問いに答えよ（設問の都合上、訓点を省略した箇所がある）。

顔魯公ノ忠義大節、照ニ映シ今古ニ、豈ニ唯唐朝ノ人士ニ罕ニ見ルノミナランヤ。比倫ニ、自レリ漢以来、殆ド可レ屈スレ指ヲ也。考ニ其ノ立朝出処ヲ、在リテハ明皇ノ時ニ、為リ楊国忠ノ所レ悪、由リ殿中侍御史ニ出ヅ東都・平原ニ。粛宗ノ時、以テ論ズルヲ太廟築壇ノ事ヲ、為リ宰相ノ所レ悪、由リ御史大夫ニ出ヅ馮翊ニ。為リ李輔国ノ所レ悪、由リ刑部侍郎ニ貶セラル蓬州ニ。代宗ノ時、以テ言フヲ祭器ノ不レ飭ととのハ元載以テ為シ誹謗ニ、由リ刑部尚書ニ貶セラル峡州ニ。徳宗ノ時、不レ容レラレ於楊炎ニ、由リ吏部尚書ニ換ハル東宮散秩ニ。盧杞ノ擅ニスル国ヲ也、欲シ去ラント公ヲ、数シバ遣ヲ人ヲシテ問ハ方鎮ノ所ヲ便スル。公往キテ見レ之ニ、責ム其ノ不レ見レ容レ。由リテ是レニ銜ふくむコトヲ恨ミ切骨タリ。是ノ時年七十有五タリ。竟ニ堕チテ杞之詭計ニ而死シ、議スル者痛ムレ之ヲ。嗚呼、公既ニ知ル杞之悪レ己ヲ、盍ク因リ其ノ方鎮之間ニ、欣然ト従フ之ニ。不レ然ラ、則チ高挙遠引シ、挂ケレ冠ヲ東去スルハ、杞之所ニ甚ダ欲スル也。而ルニ乃チ眷トシテ京都ニ、終ニ不ニ自ラ為サ去就ヲ、以テ蹈ム危機ヲ。『春秋』責ム備ヲ賢者ニ、斯レ為ス可シ恨ム。司空図ニ隠レ於王官谷ニ、柳璨以テ詔書ヲ召ス之ヲ。図陽為リ衰野ニ、堕トシ笏ヲ失シ儀ヲ、得タリ放タレテ還ルヲ山ニ。璨之姦悪過ギ於杞ニ、図ハ非ザル公ノ比ニ也。卒ニ全ウス身ヲ於大乱之世ニ。然ラバ則チ公之委ヌルハ命ヲ賊ガ手ニ、豈ニ不ラン大イニ可カラ惜シム也哉。雖モ然リト公囚ハレテ困シムモニ於淮西ニ、屢シバ折くじキニ李希烈ヲ、卒ツ之ヒニ損ヒレ身ヲ徇ヒレ国ニ以テ激シニ四海ノ義烈之気ヲ、貞元ノ反ルニ正シキニ、実ニ為リ有レ助クル焉。豈ニ天ノ欲シ全ク畀あたフルニ公ニ以テ万世之名ヲ、故ニ使ムル下一時堕チ於横逆ニ以テ成始成終ナラ者乎。

（洪邁『容斎二筆』による）

注

明皇・粛宗・代宗・徳宗…いずれも唐の皇帝。明皇は玄宗ともいう。
楊国忠・李輔国・元載・楊炎・盧杞・司空図・柳璨・李希烈…いずれも唐代の人名。
殿中侍御史・御史大夫・刑部侍郎・刑部尚書・吏部尚書…いずれも官名。
東都…洛陽。
平原・馮翊・蓬州・峡州・王官谷・淮西…いずれも地名。
太廟…皇帝の先祖をまつる廟。この時、安史の乱による火災で損壊していた。
壇…ここでは、太廟を破壊された皇帝の先祖を哭泣して祀るための壇。
散秩…職務のない官。
方鎮…節度使。辺境において軍事と民政をつかさどった官。
貞元…唐の年号。

問二十三　傍線部1「為宰相所悪」について、どういうことか、本文の内容に即した説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　粛宗の時代、顔真卿は太廟が損壊したため壇を築いて皇帝の先祖を祀るべきだという主張を行い、宰相に憎まれた。

ロ　粛宗の時代、太廟が損壊したため壇を築いて皇帝の先祖を祀ったことについて、顔真卿は宰相の失政だと批判した。

ハ　粛宗の時代、太廟の損壊に伴い、宰相の顔真卿は皇帝の先祖を祀る壇の築造を強行しようとして、人々に嫌われた。

ニ　粛宗の時代、太廟の損壊による壇の建設の意見を宰相が取り上げようとしたことに対し、平原の顔真卿が指弾した。

ホ　粛宗の時代、太廟の損壊に伴い、顔真卿が皇帝の先祖を祀る壇建設の必要を強く訴えたため、宰相に恥をかかせた。

問二十四　傍線部2「盍因其方鎮之問、欣然従之」をすべてひらがなで書き下し文に直した場合、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　なんぞそのほうちんによりてこれをとひ、きんぜんとこれにしたがはんや

ロ　なんぞそのほうちんのとひによらざるか、きんぜんとしてこれにしたがふ

ハ　なんぞそのほうちんのとひによりて、きんぜんとしてこれにしたがはざる

ニ　なんぞそれほうちんのとひにして、きんぜんとしてこれにしたがふによる

ホ　なんぞそのほうちんのとひにより、しかるをよろこびてこれにしたがふか

問二十五　傍線部3「『春秋』責備賢者」について、筆者がこのように述べた理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　『春秋』に記載された故事と同様に、顔真卿は盧杞が人々に対して不寛容だったことを厳しく批判したから。

ロ　顔真卿ともあろうものが、七十五歳にもなって盧杞の策略に簡単に騙され、危険な都に戻ってしまったから。

ハ　柳璨は盧杞よりもはるかに姦計に長け、また賢者を攻撃するという点においてもいっそう苛酷であったから。

ニ　隠者の司空図は人々から賢人であるとの評判を得ていたが、皇帝の詔書につられて柳璨のもとに赴いたから。

ホ　盧杞の凶悪ぶりは柳璨に及ばないにもかかわらず、顔真卿は司空図ほど周到に危機に対応できなかったから。

問二十六　傍線部4「陽」について、「陽」を同じ意味で用いる熟語を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　陽動

ロ　陽性

ハ　陽刻

ニ　陽気

ホ　陽春

問二十七　傍線部5「一時堕於横逆」について、正反対の境遇を指す七文字を本文の中から抜き出して、記述解答用紙の所定の欄に楷書で記入せよ。ただし、返り点・送り仮名・句読点などの訓点は除くこと。

問二十八　次の**イ**～**ホ**の中から本文の内容と合致するものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　顔真卿の忠誠心は、唐代にはほとんど及ぶものはないが、漢代以降に範囲を広げれば超越するものが少なからず存在する。

ロ　顔真卿は立派な大義を有する人物だが、誹謗中傷を受けていたので、朝廷では李輔国や元載などが彼を地方へ避難させた。

ハ　顔真卿は李希烈を強く非難し、最後には自ら犠牲になったが、そのことが貞元年間の唐朝の回復に貢献することとなった。

ニ　顔真卿でさえも一時的に人々と衝突するという欠点はあったが、その経済的功績は無類であり、天下の忠臣と評価できる。

ホ　顔真卿が盧杞の計略にかかって命を落としたのは、おそらく忠臣である彼に天と同様の高い名声を獲得させるためである。

〔以　下　余　白〕

〈2026 R 08202024〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意） 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

（採点欄）

（三） 問十七

（四） 問二十七

〈2026 R 08202024〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意） 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

国語（記述解答用紙）

（三） 問十七

（四） 問二十七